報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　ロシア語との対照分析とアンケート調査に基づいた
リトアニア語拡大アスペクト論
—バルト・スラヴ諸語の動詞の比較対照研究によせて—

氏　　名　櫻　井　映　子

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では，ロシア語との対照分析，および，リトアニアで実施したアンケート調査に基づいて，明白な文法カテゴリーとしての動詞のアスペクト的な対のみならず，アスペクト・テンス諸形式を中心としたアスペクト性の様々な表現方法とそれに緊密に関わる諸現象を，意味・機能に重点を置いて広範に考察するという，従来のリトアニア語研究とは大きく異なる「拡大アスペクト論」の構築を試みた．本論文における「拡大アスペクト論」とは，動詞の対をなして現れる「動詞アスペクト」という顕在的な文法カテゴリーの枠に捕われることなく，現代リトアニア語におけるアスペクト的な意味の表現方法を実際的使用に基づいて幅広く考察し，リトアニア語に固有の「拡大アスペクト・テンス体系」を的確に特徴づける試みである．

また，同時に，本論文では，バルト諸語とスラヴ諸語の比較対照論的観点，および，一般アスペクト論的観点の統合化の中に，現代リトアニア語のアスペクト体系を位置づけることを目指した．分析にあたっては，リトアニア語に関する従来の規範的な文法記述には必ずしもとらわれず，とくにロシア語との比較対照をもとに，可能な限り具体的な場面におけるアスペクト・テンス形式の用いられ方を明らかにし，その背後にある枠組みと運用方法について，実証的に説明している．

本論文のさらなる目的は，マクロな視野から，通時態と共時態の両観点を導入して，アスペクト・テンス体系の普遍性と個別性をとらえ，個別の現代語研究と史的研究を有機的に結びつけることにある．同時に，形式・意味・機能という相関する三つの側面を重視することにより，リトアニア語の時間表現の中核を担う動詞のアスペクト・テンス体系を，一般アスペクト研究の中に位置づけ，その基本的枠組みをなす〈perfective〉，〈imperfective〉，〈パーフェクト〉等の概念，および，テクストにおけるタクシス表現機能の相関性を明らかにするものである．

全体の論理展開としては，まず第1章において，バルト・スラヴ諸語のアスペクト・

テンス体系の通時的・共時的なパースペクティヴにおいてリトアニア語の実態を位置づけ，次に続く第2章から4章で，ロシア語との比較対照に基づきリトアニア語のアスペクト・テンス体系の形態的・構造的特質と意味的特質を明らかにした上で，さらに第5章と第6章では，リトアニア語のテンス形式の中でもアスペクトとの相関関係においてとりわけ複雑で特異な様相を呈している，分析的パーフェクト形および習慣過去形の意味と機能に関して詳細な議論を展開し，最後に第7章で論文の結論と今後の展望を示した．以下に，各章の内容を要約する．

第1章では，スラヴ諸語との比較対照を通じて，バルト諸語のアスペクト・テンス体系を概観し，バルト・スラヴ諸語の動詞の比較対照研究という包括的な観点から，リトアニア語の実態の特徴づけをおこなった．ここでの考察は，第2章以降で論じる問題を明確化するために有効であり，本論文での議論の理論的基礎を提供するものである．また，この章では，バルト諸語あるいはスラヴ諸語それぞれの言語の間の具体的な類似や差異，および，それらのもとにある系統的繋がりの問題や，地域的接触による影響など変化の要因の問題等を解明するという，発展的研究の可能性についても言及した．

第2章では，第1章でバルト・スラヴ諸語の比較対照論的観点から概略的に示した，リトアニア語の動詞のアスペクト的表現について，形態的・構造的特質と意味的特質の関わりを中心により詳しく分析した．類型論的には同じタイプに分類されるロシア語との共通点と相違点を綿密に検討することによって，意味論的な〈perfective : imperfective〉対立と〈限界的 telic : 非限界的 atelic〉対立との違いを明確にした上で，さらに，〈限界性〉を中心とするアスペクト的意味に基づいたリトアニア語の動詞分類の提案をおこなった．〈限界的 telic : 非限界的 atelic〉対立が〈perfective : imperfective〉対立の基礎となっていること，これらの対立が通時的・共時的両観点から見て，連続的な関係にあることは第1章でも述べたことであるが，その連続的な意味内容がリトアニア語の中でいかに構造化されているかという問題をここでは論じている．

第3章では，第2章で提案した動詞分類をもとに，リトアニア語の基本的アスペクト・テンス体系とタクシス的機能の相関関係を明らかにした．ここでは，ロシア語との比較対照分析と，アンケート調査の結果の分析を並行しておこないながら，リトアニア語のアスペクトとテンスの相互作用に重点をおいて議論を進めた．分析を通して，接頭辞・接尾辞を用いた動詞の形態論的なカテゴリーとしての perfective／imperfective 動詞の対なるものが，ロシア語を始めとするスラヴ諸語を基盤に形成された文法概念であり，その議論をそのままリトアニア語のようなバルト諸語に援用することには問題があることを主張し，リトアニア語に固有のアスペクト・テンス体系を，テクストにおけるタクシス的機能との相関関係を基に提示した．

第4章では，ロシア語との比較対照分析を基に，リトアニア語の分詞の時間表現に

ついて考察し，次のような点を明らかにした．すなわち，類型論的には等しい分詞体系をもつリトアニア語とロシア語であるが，形式・意味・機能を詳細に比較対照してみると，多くの重要な相違がみとめられる．概して，分詞の時間表現の基盤にある動詞のアスペクト的体系の相違により，2 つの言語では，対応する分詞形の役割分担のあり方が異なっている．ロシア語では，定形動詞と同様に分詞においてもアスペクトがテンスを統一しつつあるのに対し，リトアニア語では，分詞は，動詞のアスペクト的意味と分詞自体のアスペクト的機能の相関関係においてより多様で幅広い時間表現を担っている．また，この章では，とくに，従来の研究においてほとんど言及されていない，リトアニア語の状況語的過去分詞と主動詞の組み合わせにおける意味論的な制約の分析を通じ,分詞の意味･機能が文全体の構造の中で決定されることを論じた．

第 5 章では，アンケート調査の結果に基づいて，リトアニア語における〈パーフェクト性〉の表現について詳細に議論した．考察の重点は，リトアニア語の存在・連辞動詞 būti「ある・いる，～である」と形容詞的分詞の組み合わせによって形成される分析的パーフェクト形が，動詞の〈限界性〉と相関した〈パーフェクト性〉とその周辺の意味の表現において，いかなる使用分布をなしているのかという点に置かれている．考察を通じて，分析的パーフェクト形の意味と機能は，非パーフェクトの一般的なテンス形式と〈動作パーフェクト〉の表現において重なる部分が大きいが，その核となるのは〈状態パーフェクト〉の表現であること，他方，〈単なる動作〉の表現や，相対的テンスとしての機能は限定的であることを明らかにした．

第 6 章では，第 5 章と同様にアンケート調査の結果に基づいて，リトアニア語の接尾辞 -dav- をともなう習慣過去テンスのアスペクト的意味・機能について詳細な分析をおこなった．考察の結果，この特殊な過去形は，従来考えられてきたように「perfective 動詞」を「imperfective 化」する手段として機能するものではなく，〈習慣性〉を表す専用の形式であること，また，動詞の〈限界性〉と相関した〈習慣性〉とその周辺の意味の表現において，一般的な過去形と緩やかな相補分布をなしていることを明らかにした．ここでの分析は，通言語的観点から見て稀有とも言える，〈習慣性〉を表す屈折的なテンス形式を詳細に考察した例として，一般アスペクト論への貢献となり得ることが期待される．今後の課題としては，比較対照分析の対象をリトアニア語とロシア語のみならず，他のバルト・スラヴ諸語にも拡大すると同時に，その通時的変遷についても詳しく調査することを挙げている．

以上の議論を通じて，本論文は，バルト・スラヴ諸語の動詞の比較対照研究というより広い視野から，リトアニア語とロシア語，2 つの言語のアスペクト・テンス体系における機能意味論的対応を示すことによって，時間認識の言語化の過程における諸言語の共通性と個別性を明らかにし，言語間の概念化に関する普遍性と多様性の一端を浮き彫りにすることを最終的な目的としたものである．